
エアーガンに吹かれてなんぼ

天猫 紅楼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エアーガンに吹かれてなんぼ

【Nコード】

N0464K

【作者名】

天猫 紅楼

【あらすじ】

金型洗浄という仕事。本来、男が携わると思われがちな仕事だが、この会社は違っていた。全員が女ばかり。皆で仲良く楽しく過ごしていたのだが、新人が入ってきたことで空気に乱れが出来てしまった。香澄はこの問題をクリア出来るか？ 成長しろよ、香澄！

（前書き）

この小説は『職業小説企画』に投稿するために執筆しました。
ですので、かなりマニアックな内容になっております。

この企画『職業小説企画』に出会う前から、自分の仕事について何か形にしたいとずっと思っていました。

ですので、今回この企画に参加することが出来たことに大変感謝します。

要するに、自分大好き人間（！）なので、自分の事を知って欲しいだけだったりするんですけどね（笑）

色々な仕事をしてきましたけれども、その中でひとつを選んで題材にしてみました。

金型洗浄

プレス加工をする過程で、必ず必要とされる鉄の塊 通称『カナガタ金型』

プレスする回数が増えるにつれ、汚れや油などが溜まり、製品のキズやバリなど、不良不具合が多くなる。

その為、現場の区切りがついた時点で金型を機械から下ろし、『金型洗浄チーム』がそれを分解↓洗浄↓組立をして、再び現場に戻すことで不具合を軽減しようというもの。

分解洗浄することで、部品の欠けやクラック（ヒビ）などが発見されることもあり、成形中のアクシデントを回避することができる、という利点もある。

そんな感じで、一般にはあまり馴染みのない作業ですが、興味が持
たれたのであれば嬉しいです。

ではごゆっくりと どうぞ♪

天猫 紅楼

私、仲嶋香澄^{ナカジマカスミ}はイラついていた。

目の前には4歳年下の矢坂^{ヤサカ} 智^{トモ}が金型の組み付けと格闘している。

定時まで残り30分。

定盤^{ジョウバン}の上には、洗浄を待つ金型たちがズラリと並んでいる。

『はあ……』

心の中でため息をつきながら、私は自分の仕事を急いだ。

私がアサイ株式会社に入社したのは7年前。

大学へ行こうなどと露とも思っていなかった私は、自然に就職活動をし、『検査業務』の募集をかけていたこの会社に入社した。

ぶつちやけ、やりたい事も特になかったので、なんでもよかった。

なんとかなるだろう、という軽い気持ちだった。

だが、入ってみると状況が違うというのは どこでも一緒なのだろうか？

ピチピチ新入社員の私の目の前には、鉄で出来た一畳ほどの机『定盤^{ジョウバン}』が二つ並び、その上には見たことのないような工具と思われるものやスプレー缶などが整頓されて置いてある。

きょんとしている私に、引率していた人事のおじさん　高田さんが声を掛けた。

「仲嶋さんね、ここでやつてもらっちゃうから」

「え？」

につこりと微笑む高田さんに何も言えずに立ち尽くしていると、彼は構わず続けた。

「上田さん、ちょっと」

呼ばれたのは、私より少し年上に見える若いお姉さん。　高田さんと話す横顔がキリッとしている。被っている帽子の横に、バッヂが見えた。

『班長？』

そう思っていると、班長のその人はにつこりと私に微笑みかけた。人懐こそうな黒目がちな瞳が印象的だ。

「ウエダ ミスズ上田美鈴です。　よろしく」

その後ろには、2人の女性が定盤に向かって何やら作業をしながら、チラチラとこちらを見ている。

人事の高田さんはいつの間にか消えてしまった。

「紹介するね、こっちが長塚さん。　で、あっちの大きいおばさん

が高梨さん」
すると

「ちよつと、『大きいおばさん』はひどくない？」
と高梨さんが目をむいた。 体もさることながら、目もぎょろつと
している。

『魚系……？』
等と思つてゐる横で、

「まあまあ、分かりやすくていいじゃん」
笑いながら、長塚さんがフォロー（？）している。
高梨さんも本気で怒つてゐるわけじゃなさそうだ。

「以上、私も入れて4人のチームになります。 はい、これが仲嶋
さんの工具箱だよ」

差し出されたのは、透明のプラスチックの箱。
中には工具が綺麗に揃つてゐる。

「これが、六角レンチセット、これが砥石^{トイシ}2個ね。 あと、ドラ
イバーセットに……使いながら覚えていくといいよ。」
そうだね、全部いっぺんには覚えられないわ……

「よろしくね」
長塚さんと高梨さんが微笑んでいる。

「は、はい」
分かつたのは、皆優しそうな人だつてことと、あきらかに検査をす
る場所じゃないってことだった。

約500人の従業員を雇っているアサイ株式会社の工場は3つ。
折からの不況で業績もあまり上がっていないらしい。
が、社長は

「会社が成り立っているのは社員のおかげ」

と、役職についている者よりも、正社員やパートの給料を下げることはなかったし、年2回の賞与も無くなることはなかった。

社内の空気も悪くなく、皆が仲の良い印象を受ける。

大手の下請けながら、結構いいものを作っているらしい。

ペーパーの私になんて、よく分からないけどね……

そんななか、私が配属されたチームは異彩を放っている。

『金型洗浄チーム』

会社全体で13人。

なんでも、先代社長の鶴の一声で立ち上がったチームらしい。

まず、『金型』とは何か。

モノ作りの過程で、ほとんどコレ無しでは仕事にならないという程、
どこの工場にもあるもの。

木や紙で出来たもの等もあるらしいが、私たちの会社では 鉄の塊

の金型を扱っている。

2つ以上のパーツが1セットとなっている。

ウツガタ シタガタ
上型と下型とか、固定と可動とか呼ばれたりするが、要するに、2つの型が合わさってひとつの形を作り上げる為の道具だ。

簡単なもので言えば、たい焼きの作る型もその仲間だと思う。

大きさも様々で、手のひらサイズから、クレーンで吊らないと動かせないものまで。

製品の数だけ、金型の種類はある。

その色んな種類の金型を、ひとつひとつの部品になるまで分解し、ひとつひとつを綺麗に洗浄するのだ。

その部品も、手のひらサイズの重いものから、息ひとつで飛んでいってしまいそうな針の様に細いピンまで、多種多様。

洗浄方法は様々で、洗浄液がスプレー缶に入ったものを拭きつけながら筆やブラシなどを駆使したり、小さな部品は超音波洗浄槽に入れて綺麗にしたり。

この超音波洗浄槽の中には、たんぱく質を分解する液が入っているんで、切り傷を負った指なんかに触れたりすると激痛が走るという強力なもの。

そういった液が皮膚に合わなくて職場を異動していく人もいるのだとか。

いくら手袋をしていても、絶対触れないものって無いから。

幸いなことに私の皮膚は丈夫だったようで、臭いが気になるものもあるが、なんとかやっていけそうだ。

それらを綺麗にした後は、元通りに組付けする。

一つ一つの部品を手に取り、砥石トイシと呼ばれる砂が固まっている固形物でなでる。

そうすると、わずかなキズや欠けがあると引つかかる。

それを綺麗に平らにするのだ。

これは手のひらに伝わる微妙な感覚を感じないといけなない。

部品にざらついた所があると、うまく組み合わない。

全て計算ずくで組み立てられているのだ。

それに、部品が逆に入っていたり、汚れが残っていたりすると、製品に影響が出る。

下手をすると製造が始まった途端に金型自体が壊れてしまうこともあるので、重要な仕事だ。

毎日計画された予定通りに数をこなすような検査や現場の仕事とは少し違い、金型洗浄チームでは突発的な仕事もよくある話。

急ぎのものであれば、朝イチに機械から下ろされたものを半日ほどで手分けして分解洗浄しなくてはならなかったり、中には一ヶ月くらの余裕があったりする。

私にとって、見るもの触るもの全てが新鮮で興味をそえられるものばかりだった。

作業内容は、金型を分解して洗浄して組付けするだけ。

それだけのことなのだが、型によっては部品が20〜30個で済むものもあれば、100を超えるような部品で形成されているものもある。

基本の形こそあれ、人間と同じで全く同じ型は無い。

もともと細かい手作業が好きだった私にとって、この仕事は願ったに叶ったり。

興味があることであれば、仕事の飲み込みも早い。

2年目に入るころには、1人で1セットの型を受け持てるようになった。

それもこれも、優しく見守ってくれた先輩たちのおかげともいえよう。

班長の上田さんは、6歳年上の25歳。

若くしてその手腕を買われ、班長にまでなったすごい人だ。

いつも明るく、何でも聞いてくれるので、私も色々とお世話になった。

自分で分かなければ、すぐに他の先輩に聞きなおしたりして、一緒に成長しようとする姿勢もあって、他のメンバーたちにとっても頼りがいのあるリーダーだ。

長塚さんは3年先輩の28歳。

おっとりした印象はあれど、作業はいつも丁寧で、メンバーの中では一番ミスが少ないのだと上田さんが話していた。

物静かながら、何かと上田さんのフォローまで出来るという、しっかりした一面もある。

最初に「大きいおばさん」と紹介された高梨さん。

細かい作業は苦手なようだが、大きな部品も軽々持つては洗浄槽へ投げ込んでしまうので、一緒に作業をするとラクなのだと、皆口をそろえて言っている。

少々手荒なのと、大雑把なところがネックなのだが、何でも先に気づき世話をしてくれるので、チームのお母さんの存在だった。

そんな中で可愛がられながら(?)育ったので、気負いすることなく伸び伸びと成長することが出来たのだろう。

ホントに、皆には感謝だ。

そして7年が過ぎた。

不況のあおりを受け、チームにも新人がずっと入ってくることはなかった。

要するに、私が一番年下なのだ。

もう25にもなるのに。

たいして寂しいとは思っていなかったが、毎日同じメンバー、同じ作業に少し飽きてきている感じはあった。

そんな矢先……

私にも後輩ができた。

矢坂 智。

入社3年目。

検査チームからの異動だった。

特に、私達に人員が欲しかったわけでもないのに、何故か異動が突然決まった。

班長の上田さんも断ることが出来ず、仕方なく引き入れたらしい。

そして、その上田さんの言葉に私は驚きの声を上げてしまった。

「えー？ 私が教えるんですか？」

見回すと、優しい微笑みでこちらを見ているメンバーたち。

上田さんが言った。

「教えることで、自分の見直しも出来るからね。 1度は経験したほうがいいと思って。 どうしてもダメだったら、皆もいるし、頼ってくれていいからね」

優しく諭す上田さんに、私は不安一杯の心で苦笑いをした。

確かに、誰かに教えてみたいというささやかな希望はあったが、いざその時が来ると動揺する。

矢坂さんが異動してきたタイミングで、私達のチームは2人ずつに分かれ、工場内にバラけることになった。

その方が、製品を作る現場との関係もスムーズになるという利点があるため。

たいして大きな工場でもないのに、何かあればすぐに駆けつける事が出来るので、仕事内容が滞ることはまず心配ないだろう。

心配なのは、私が矢坂さんを引き受けたことだよ……

実質、私ひとりで彼女を指導することになる。

上田さんはあちこちに動き回っているのに、ずっと見てくれているという保障は無い。

新人がどう成長するかは自分の肩に掛かっている……

でも引き受けた以上、私も覚悟を決めることにした。

はあ……でも心配……

翌日、私の前に矢坂さんが現れた。

帽子から覗く、肩までの髪は金髪でフルメイク……

いわゆる『イマドキの子』だ。

だが、いざ話してみると、性格はいたって真面目で、仕事には真剣に取り組んでいるようだった。

ただ……

私の心には、昨日の帰り際にそつと耳打ちされた高梨さんの言葉が残っていた。

「急にココに異動に決まったのか、知ってる？ 検査でなんかへましたらしいよ。金型洗浄チームって、ちよつと人材の掃き溜めみたいな所あるからねえ……」

そんな噂は聞いたことあるけどね……

はたから見ると、割と自由に動けて会話もしやすい環境にあるため、『遊んでいる』印象を与えやすいのだそう。

本人達は一生懸命なんですけどね。

確かに、ヒマな時はのんびりやってますけどね。

でも、

『金型洗浄なら出来るんじゃない？』
的に思われるのはすごくイヤだ。

私の前に、早くも難題が立ちはだかった。

彼女はとても不器用だった。

細かい作業になると、途端に作業が遅くなる。

相手は鉄だったり銅だったりするので、下手をすると、コンとぶつただけで凹んだり折れたりする。

基本的には、穴に対して真っ直ぐに動かす。

少しでも斜めになれば、そこで引っかけて動かなくなる。

そんな繊細な作業を必要とするのだが、これはどうしても体で覚え

なくてはならない。

口で言っても限界がある。

私もそうだった。

「いくら小さくても、複雑な部品だと修理費が『万単位』なんだからね」

と、半分脅されながら教わったものだ。

長年やっている、この金型のこの部品は割れやすいとかがあらかじめ予測できる。

それに、怪我の心配もある。

型が倒れたら指がミンチになるし、尖った部品だと簡単に皮膚が切れる。

長くやっている私でさえ、知らない間に血が出ているときが多い。そんなだから、私は矢坂さんの怪我を防止することから注意していた。

基本さえ守っていれば、まず大きな怪我は防ぐことができる。

矢坂さんに教えていくうち、私は自然に自分の作業の見直しまでやることとなった。

慣れた仕事になると、どうしても簡単に済ませたり作業を飛ばしたりしてしまうものだ。

自分はその間にはないと思いつつ、知らない間に身についていた簡略化は、正直シヨックだった。

上田さんの言った通り、いい経験になる。

だが、時間の流れというものは恐ろしいものだ。

矢坂さんと日々を過ごすうち、だんだんと彼女の存在がうとましく思ってきてしまっていた。

今思えば、初心をすっかり忘れていた。

もともと面倒くさがりやな私は、同じ事を言うのは2度までと決めていた。

何度も同じ事を聞かれるとイライラするのだ。

実際、ひとつと同じものがない金型を相手にするのだから、同じ部品（名前）のものがあっても、形が少しでも違うと迷いやすい。だから矢坂さんには、初めにメモを取るようお願いした。

1度やった金型は、今度いつ再びやるかも分からない。その時に見直すことも出来る。

現に、私のメモ帳も、一冊がいつぱいまで記入されている。それは今現在も続いているのだ。終わりの無い、奥の深い仕事なのだ。

自分と同じ事を要求しているつもりはなかったのだが、作業の速度、出来上がりの様子（汚れの取れ具合）など、日を追うごとに、あきらかに自分の足を引っ張られている思いが強くなっていく。

そんなイライラがつつのり、顔にも出てしまっていたかもしれない……

次第に矢坂さんとの会話が少なくなっていた。

もともと「金型洗淨」という仕事は、だいたい2人ペアでの作業をするので、雑談をしやすく、例えば仕事の話をしても遊んでいると見られがち。

だから、班長である上田さんからは、出来るだけ周りからへんな目で見られないようにという注意はよく受けている。

上田さんも、上司からの重圧に大変なんだろうな……

そんな仕事なので、私達ペアは黙々と真面目に作業していると思われるれていたかも。
それはそれでまあいいや。

ただ、上田さんたち他のチームの人たちとは普通に話せるのに、矢坂さんだけは全然会話が続かない。
休憩時間のちよつとした時間でも、近くにいるのに会話が無い。

『なんかへんな雰囲気……』
そんな不穏な空気が、私達の間には漂っていた。

そんななか、金型洗淨チームだけで飲み会をやるつという話が持ち上がった。

幹事は、飲み会大好きな高梨さんだ。

前々からそういう話は出ていたのだが、なかなか時間を合わせられず、先延ばしになっていた。

とうとう半ば強引な形で日時が決まり、13人ほとんどが参加となった。

私も飲むのは好きで、多くは飲めないが、皆で語り合い楽しめる空間が大好きだった。

いつもは見られない姿を見られるのが楽しみでもあるのだが、皆楽しいお酒を飲める人ばかりなので、参加することに気負いはなかった。

しかも、女ばかりなので結構な噂話も飛び交う。そんな交流の場でもあるのだ。

だが、忘年会や新年会など、季節の行事に集まることはあったが、何もない中途半端な時期に飲み会を開くのは初めてだった。あえて言うなら、矢坂さんの歓迎会といったところか……

当日、居酒屋に集合した金型洗浄チームの面々。

普段、帽子に作業服の姿を見慣れているだけに、私服になると皆雰囲気違って見える。

工場が離れていて、普段会えない人にも久しぶりに会った。皆元氣そうだな。

矢坂さんも思っていた通り、ミニスカートにフワフワの緩いカールスタイルがいいから、きつと何を着ても可愛いんだろぅな。おばさんたちに褒められて、上機嫌だ。

軽く矢坂さんの紹介と挨拶を終えると、飲み会開始だ。

酒が入ったこともあり、皆の盛り上がりは右肩上がり。

もちろん私も、美味しい料理の店と聞いていた期待もあり、充実した料理の数々に舌鼓を打ってた。右手には生ジョッキ。

今日は何杯イケるかな。

金型洗浄チームは、全員女性で構成されている。

チームを作った社長いわく、

「男性よりも女性の方が、仕事にたいして丁寧で正確である」
との個人的意見から。

まあ、それだけ女性をいい意味で見ているのだろう。
悪い気はしない。

男性が居ないことで『出会いが少ない』という事ぐらいか。

かく言う私もまだ独身だ。

あと独身で言ったら、矢坂さんと…… 4人か。

ママさん軍団が子供の話になると、私は全然中に入っていけず、大人しく聞く側にまわる。

そうしながら、私の知識は膨らんでいくばかり……

……あー、男欲しいなあ……

なんて思っていると、矢坂さんがごそごそし始めた。

「どうしたの？」

という上田さんに、

「あの、これから友達と会う約束してて」

そつえば、やけに大きな鞆を持っている。

キーホルダーがたくさん付いてる。

「友達じゃなくて、彼氏でしょー？」

赤い顔をした高梨さんが茶化すと、矢坂さんはにっこりと笑ってか

わした。

「やだー、女友達ですよ。すみません、途中抜けしちゃいますけど」

拝みポーズしながら、矢坂さんはあっという間に出て行ってしまった。

「そういえば、そんなこと言ってたわ」

長塚さんがおっとり口調で言った。

頬が赤い。だいぶ酔ってるのかな、顔がニコニコしている。

「でも、私聞いてなかったよ」

私の心の声が漏れてしまった……

上田さんが目を丸くして言った。

「一番近くに居るのに？」

「そつだよ。あまり話自体しないもん」

と言うと、高梨さんが心配そうな顔をした。

「仲、良くないの？」

「と言うより……」

私は少し考えた。

このまま流れに任せて話してしまおうか……
いいタイミングかもしれない。

酒の力も借りて、話すことにした。

「なんか、矢坂さん見てるとイライラするんだよね……」
皆が私に注目してる。

「新人だし、まだ要領つかめてないのは分かってるんだけど、何ていうか…… 矢坂さん、不器用だから作業遅いし。その分、私がフォローしなきゃいけないくて、また全体の仕事が遅れてくでしょ？
なんかストレス溜まる……」

「まあ、それは仕方ないよね」

長塚さんが言った。

「誰だつて通る道だもん」

優しい笑顔だ。

長塚さんの笑顔はいつも、なんか和むわ……

その横で上田さんも、

「そうだね。　そういうのも、本人分かってないかも知れないからさ、全体が見られる仲嶋さんだから分かってる事なんであって。

先輩として、それはこれからの課題だね」

背中をポンと押してくれた気がして、私はすごくホッとした。

「そうだね、本人はきつと一生懸命なんだしね。　もうちょっと頑張ってみるよ」

先輩として、教えることを怠っていたんだよね。

だから、私が変わることで、矢坂さんも良い方へ変わってくれば
いいことだし。

不器用なのは仕方ないとして、それをどうフォローするかを考える。

もしかしたら、作業を見直していくことで改善できるかもしれないし。

アドバイスをたくさん頂いた！

そんな私の相談事の最後は、こんな言葉で締められた。

「普通だったら、『仕事出来なきゃクビ』だよな。私らって、優しいよねー」

せつかく入ってきた新人だ。

私が居なくなっても、一人で仕事出来るように育てるのが、先輩の役目だ。

私自身、そうやって育てられたハズ。

なんだか心が明るくなって、再び前向きに動き出し始めた。

週が明け、心機一転、気持ちも新たに出勤した私。
朝イチで矢坂さんに声を掛けた。

「おはよう！」

につこりと微笑む私の前で、彼女はどこか冷たい目をしていた気がした。

「おはようございます」

どこか事務的な口調で挨拶を返し、自分の席へ着く矢坂さん。

「??」

何か拍子抜けたような感じに襲われながら、私も自分の席へ着いた。と言っても、彼女の目の前だ。

『ま、そんな急に馴れ馴れしくはなれないよね、少しずつだ』
そう思いながら、仕事を始めた。

今日は50センチ四方くらいの大きな金型を分解洗浄だ。

製品を作る部分『コア』は一番大切なところ。

大きな金型だと、コアも大きいことが多い。

そして、複雑にいくつかの部品で一個が構成されていることも多い。ひとまとめの固まりにしてもいいじゃないかという声もあるのだが、わざわざ細かく分けることで、洗浄したときに汚れが取れやすいとか、万が一割れたり欠けたりしたときに修理費用が少なくて済む。その分、後で組み間違えの無いように注意しなくてはならない。

作業が落ち着いたころ、やっと私は積極的に話しかけてみることにした。

「この間は楽しかったね。 帰り、大丈夫だった？」

彼女は黙ってうなづきながら、手元を見ていた。
作業に集中したいのだろうか。

でもどこかいつもと違う……そんな雰囲気を感じつつ、自分も焦っちゃだめだと自分に言い聞かせた。

でも……何かおかしい。

どこか避けられてるような気がするのだ。

そんな思いは次第に大きくなり、仕事にも集中できなくなった。

ガンッ！！

「痛っ！！」

遂に、指をハンマーで打ってしまった。

これはかなり痛い。

左の親指、第一関節が赤く腫れた。

『うわぁ…… 関節イツちやったかな……』

指を動かしてみると、痛みはあるものの、なんとか普通に動かせそうだ。

これなら大丈夫かもな……

帰ったら湿布貼ろう。

そんな私の様子を目の前で見ていたにも関わらず、

「大丈夫ですか？」

の一言も無い……

やっぱり、何かおかしい……

矢坂さんは、半日経っても変わらず冷たい態度。目を合わせようともしない。

「??」

私はただ訳が分からずに一日を終えた。

家に帰ると、昼間ハンマーでやってしまった左親指に湿布を貼った。
まだ奥がジンジンとうずいている。
心も、どこかモヤモヤが残っていた。

「どうしたの？」

と聞くべきか？

それとも、放っておけば時間が解決するのか？

答えは全く見つからず、翌日を迎えてしまった。

その日も矢坂さんは相変わらずで、私達はほぼ無言のまま、その日を終えた。

これじゃあ、仕事にならないよ……

いや、仕事には なってるか……

考えてみれば、今週に入ってから矢坂さんの作業がぐんと早くなつた気がする。

部品を掃除するのにも、以前はとてじつくりと観察しながら、丁寧に残った汚れをふき取っていた。
時間に余裕のある仕事ならばそれで充分なのだが、急ぎの仕事でそ

れをやられるとたまったもんじゃない。

モノに体が慣れるのも大事だと思っているので、何も言えないでいる私。

それが私のストレスのひとつだったのだが、それが今はすっかりなくなった。

「作業、早くなっただね」

私なりに、優しく話しかけてみた。

「……」

彼女は無言のまま、でも、何となく形式的な笑顔を作った。

…… 固い ……

どうなってるんだ??

私の中のモヤモヤは濃く深くなっていくばかりだ……

そうして一週間が過ぎ、金曜日を迎えた。

毎週金曜日には、決まってミーティングがある。

工場ごとで集まり、作業の進め方や問題などを毎回話し合うのだ。

5人しか居ない私達のチームは、いつも他愛の無い話をして、ものの10分ほどで何の問題もなく終わる。

のだが……

今回のミーティングは違っていた。

いつものように上田班長が報告事項を読み上げ、

「あとは、何か困ったこととか、無いですか？」

お決まりのセリフ。

いつもはここで

「ありませーん」

の一言で終わりなのだが。

「あの一……」

高梨さんが、重そうに口を開いた。

「そろそろ、メンバーのローテーションとか、考えたほうがいいと思うんですけどー……」

「??」

私は、突然何を言い出すのかと内心驚いた。

たいてい、そういった事は事前に何かしらの話題で皆の耳に入っている。

そして、ミーティングで改めて話題に出すことが多かった。

『私だけ聞いてなかったのかな?』

実際、ほとんどボートとした状態だったからな、この1週間……

「何故、そう思っんですか？」

上田さんが言った。

『よかった。私だけ聞いてなかったわけじゃなかったんだ』

その言葉に、高梨さんは私をチラッと見た。

「？」

そして、どこか言いくそうに話し始めた。

「いやあ……あのー、仲嶋さんの本心を知っちゃったからねえ……

何か動かないといけないんじゃないかと思って……」

「！？」

『ちょっと待つて。私の本心って何よ？』

動揺している私の横で、高梨さんは続けた。

「一人に負担がかかるより、皆で分担して行っただ方がいいんじゃないかなあつて。ほら、そろそろ、他の現場の金型も忘れちゃいそうだし……」

……後半は、付けたしたな、あきらかに……

という事は……

『矢坂さんにしゃべっちゃったのー？』

私は、ガーンと頭に石がぶつけられたようなショックを受けた。

『勘違いしてる！ 高梨さんも、矢坂さんも！』

直感でそう思った私は、急いで口を開いた。

「い、いや、あのね、私はあの時、自分が変わらないといけないんだねって、相談のつもりで話したつもりなんだけど！」

目の前に居る上田さんも、あまり大きな事として受け止めていないみたいで、私と高梨さんの顔を見守っているようだった。

長塚さんも、特に表情は変えず、黙って聞いている。

いつもむやみに口出しをしない人なので、今回も何も言わないだろう。

矢坂さんは……見れないっ！

『なんで、こうなっちゃったの？ 私、こんなにオオゴトにするつもり、なかったのに！』

そんな心の叫びも届かず、結局ペアが変更されることになった。

変更とはいえ、2ヶ所ある仕事場のうち どちらかへ行くだけなので、毎日顔は合わせることになる。

そんなことより、思わぬ大事件となってしまったことに驚きを隠せず、午後の仕事もまともに出来なかった。

そんな私に、矢坂さんが1週間ぶりにまともに話しかけた。

「あの、すみませんでした。なんか、大変だったみたいで……」

「大変？」

ああ、顔が引きつる……

「だって、私の性でストレスが溜まってたんでしょう？」

はあ……

私は大きくため息をついた。

『やっぱり、勘違いしてるし……』

そして、タイミングは今だとばかりに話し掛けた。

「違うの。何か勘違いしてるみたいだけど……矢坂さんは新人さんだから、出来なくて当たり前なの。これは、馬鹿にしてるわけじゃなくて、誰でも、私だって最初は何も出来なかったんだから。それを、教えていくのは、私の役目でしょ。だけど、その役目を忘れて、自分の事ばかり考えちゃって……だから悪いのは私。矢坂さんは何も悪く思うことはないよ。謝るのは私の方……」

たくさんしゃべったが、届いただろうか……

心配に思いながら恐る恐る彼女の顔を見ると、少し穏やかになっている気がした。

「そうだったんですか……私はてっきり、仕事が遅いことにストレスが溜まってイライラしてるって……」

『いや、それは間違いじゃないんだけどね……』

「そう思っちゃいけないだよ、先輩だからね」
私は苦笑いをした。
本当にダメな先輩だ。

「矢坂さんは丁寧にやってくれるから、覚えればもっとスムーズに作業できると思うし、任せられるようになると思うし。不安なところは無いから。」

「そうなんですか」

矢坂さんのホツとした顔を見て、私も胸をなでおろした。
きっと彼女も悩んでたんだろうな。

でも、言い出せなかったんだ。
申し訳ない……

私は、気になっていたことを聞いてみることにした。

「で、誰から聞いたの？」

「あ、高梨さんから。日曜日にメールがあつて、こんなことを言つてたよつて」

「やつぱり……でもあの人、気を使うのは天下一品だから。ちよつと見切り発車的なところはあるけどね」

「あ、それ、なんか分かります」

やつと2人で笑いあえた。
よかった……

結局、ペアは私と長塚さん、高梨さんと矢坂さんになり、それぞれ分かれた。

帰り際、高梨さんがボソツと私に話しかけた。

「仲嶋さん、あれでよかったのかしら？ 私もあれから結構考えちゃつてね。ほら、仲嶋さん、あまり物言わない人だから。」

「あんなに大きくしなくてよかったのに！」

私は、少し怒つたように言つてやつた。

すると高梨さんはびっくりして目を丸くした。

「ホントに？ あらー、ごめんなさいね、でも、また違う仕事場でペアも変われば、ストレスも治まると思うしね。」
すでに高梨さんはニッコニッコしている。

……なんて前向き……

とりあえず、矢坂さんとの確執は消えたみたいで、またいつも通りの週明けが来た。

相変わらず、金型洗浄の仕事自体は表舞台に出るものじゃない。なので、たいした評価もしてもらえないのが現実。やって当たり前、綺麗にして当たり前。

「その当たり前のことをしてるんだから、少しは褒めてくれよ！」
というのが私達の口癖。
ま、この先もずっと、縁の下の力持ち的存在に変わりはないのでしよう……

それでも私は、何故か、この仕事が好きなんです。
おばさんになって、目が見えにくくなるまで、頑張ってみようと思ってます。

いろいろあるけど、ね。

―― 完 ――

（後書き）

さて、どうだったでしょうか？

かなりマニアックだったでしょう？（笑）

金型洗浄の仕事というのは本当に奥が深く、説明するととても長く複雑になってしまうので、すごくすごく簡単にまとめました。

通常、男の仕事とされているであろう、金型に携わる仕事。

他の仕事と同じように、とてもやりがいのある仕事だと思っています。

ただ単に、好きだっただけですけどね（笑）

仕事を仕事として終わらせるか、もしくは楽しむかはその人次第ですから。

何事も楽しめばなんとかなるですよ。

この企画に出会えた事で、いい経験が出来ました。

最後に、この企画を立ち上げてくださった香穂里さん、スタッフ、読んでくださった皆さん、ありがとうございました。

天
猫
紅
樓

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0464k/>

エアーガンに吹かれてなんぼ

2010年10月9日05時48分発行